

ベルクソンにおける「過去の実在性」について

山 田 秀 敏

(一)

拙論の目的はベルクソン哲学の中心概念である「持続」論のある一面を、彼の『物質と記憶』における記憶論を中心にして、論述することである。そのためには、われわれはベルクソンの記憶論のなかでも、かなり特徴的であると思われる思想すなわち「過去の実在性」に議論を集中したい。ベルクソンが「持続」を主張するためには、過去がある意味で保存されていることが必要不可欠である。「もっとも安定した内的状態として、動かぬ外物の視覚を例にとってみる。その物体はいつまでも同じであり、それを私は同じ側から同じ角度で同じ光の下に見つめるとしよう。いくらそうしてみても駄目で、現に私の見ている視覚的像はたった今見たそれとはやはり違う。それが一瞬間時間が経ったというだけでも違う。私の記憶がそこには控えていて、それが過去から何者かを現在に押し込む。私の精神状態は時間の道を進みながら、持続をかきあつめてたえまなく膨れていく。いわば自分を芯にして雪だるまを作っているようなものである」⁽¹⁾。「持続」の雪だるまを作るためには、過去が消え去っていてはならないということである。

実際、ベルクソンは『物質と記憶』においても「過去の実在性」を主張しているのであり、それを例えば次のような引用例によって示すことができるだろう。「過去がそれ自体で残存するというこのことは、したがってどんな形にせよ免れるわけにはいかない」(p.166)。「わたしたちが一挙に身を置くのは過去である」(p.269.,cf,pp.149-150)。「もし過去が記憶の状態で、現在の中に沈没しているのではないなら、その現在のなかに過去を読もうと努めても無益であろう」(p.251)。このような意味でベルクソンは「過去の実在性」を主張しているわけであるが、過去が実在するという思想は非常に理解しにくいものである。なぜなら存在しているのは現在だけであるように見えるからである。そこで、われわ

れは「すべて存在するものは現在において存在しているのである」という主張を論敵に見立てて、ベルクソンの「持続」論にアプローチしていきたい。それが拙論の目的である。

(二)

「過去の実在性」ということからさまざまな問題を立てることができるだろうが、ベルクソンが『物質と記憶』において「過去の実在性」をいう時、それは次のような問題を提示しているのではない。むしろ、これから挙げるような問題の立て方自体が誤っていると主張しているのである。

過去の物質的な実在性をベルクソンは問題にしたのではない。『物質と記憶』のベルクソンにとって物質は絶えず再開する現在として把握されている。すなわち物質は過去を保存しないものとして考察してもその本質的な部分は失われないとされている。物質宇宙全体の過去の現在への残存は、それをここで問題にすることはできない。

また、われわれの誰もが知らない過去の出来事の実在性をいかにして証明するかという問題があり得るであろう。この問題は、われわれの意識から独立するものの存在を認めることができるかという認識論上の問題に時間性を導入することによって生じるのである。いわば時間的な観念論と実在論の問題でもあろうが、個々の物的なものの過去が問題になる限り、これはベルクソンにとっては解決済みの問題であった。というのは、これはいわば後向きの「予見」の問題であるからである。ベルクソンにとって、ニュートン物理学が使用している数直線的時間は、実は同時性の体系にすぎなかった。そのような時間は純粹持続ではなく、映画的な時間にすぎなかった。したがっていくらでも「巻き戻し」ができるのである。誰も知らない過去の出来事とは、まだ巻き戻されていない同時性にすぎないのである。したがって過去の物質的な実在性はこれを問題にする必要がない。

したがって、われわれが過去を知り得るのは物質的な何らかの法則によるのではない以上、記憶によるのである。ここから『物質と記憶』におけるベルクソンの真の問題が始まる。

われわれは過去の出来事について現在持っている記憶によって、少なくとも過去が実在したということを知る。記憶をもっているのは現在においてである。かつ記憶の対象は現在、不在である。したがって記憶は「無」に通じているという主張、すなわち過去は非存在であるという主張がなされるであろう。ところがベ

ルクソンにとっては過去は実在するのである。ベルクソンがそのような主張を敢えてしたのは何故か、それを探求していきたい。

(三)

実在するのは現在だけであって、過去も未来も非実在的であるという主張が時になされる。過去は「もはやなく」未来は「まだない」からである。ところが、この主張を推し進めていけば、現在は瞬間にすぎないということに気付かざるを得ないから、本当は現在も「ない」のであって、時間そのものが何か非実在的なものであるとされるであろう。時間を越えるものこそが眞の実在であるとされるのである。ところが、この立場を首尾一貫して維持することは出来ないと思われる。というのは、時間がわれわれを眞の実在からひきはなしているベールのごときものにすぎないとしても、次になぜわれわれがこのベールを必要としているのかを説明することができなければならぬからである。しかし、いったん時間が非存在にすぎないということになってしまえば、時間は端的に「ない」というだけのことであって、時間が必要であるとの説明はできないはずである。したがって、この立場は「飛んでいる矢は止まっている」と言ってすますか、眞の実在ではないが全くの非実在でもないものとして時間を復活させざるをえなくなるであろう⁽²⁾。

そこで、瞬間的な現在ではない「今」の系列によって時間を再構成しようとする議論が生じることになるであろう。われわれの知っている時間は今・今・今の系列だというのである。ところが「今」は「より先」および「より後」に対しての「今」にすぎない。そうでないとするならば、つまり「今」しかないとするならば、過去の「もはやない」・未来の「まだない」という性格を定義することができないからである。その上、過去も未来も「ない」とされるが故に、それらは非存在という同じ性質をもつとされてしまうであろう。ところが、これは明らかにわれわれの経験に反する。過去の「ない」ことと未来の「ない」ことはわれわれに全く別の印象を与えるからである。そこで「より先」・「より後」を言わずにはすまされないが、これは時間の連續性を仮定することなしには、すなわち当面の問題に関して言えば過去にも何らかの存在資格を認めないことには「今」を提示することが不可能であるということである。「しかし、よく考えてみよう。もしも古い現在が現在であると同時に過去にならなかつたならば、いかにして新しい現在が生き残るだろうか。現在が現在であると同時に過ぎ去らなければ、い

かにしてある現在は過去になるのだろうか」⁽³⁾。

これらふたつの立場は、現在的なものによって過去を再構成できるという共通した思想をもっている。過去の出来事についての記憶は現在のものだからである。したがって、この問題を記憶の問題に還元することができる。すなわち過去の出来事について現在もっている記憶が過去に属するものである、とわれわれが知っているのは何故かという問題である。それがまさに記憶だからだと言うだけでは、単なるトートロジーである。また、われわれが現在において知覚を持っていることは疑い得ないから、現在の知覚と過去の出来事についての記憶との差異が問題になる。つまり、過去の出来事について現在持っている記憶が過去に属することが何故わかったかという問題は、われわれが一方で現在的な知覚をもっている以上は、具体的には前者と後者がいかにして区別されるかという問題を生み出す。

現在を考察の出発点とすれば、知覚と記憶を区別することはできないというのがベルクソンの意見である。そこでは記憶と知覚は定義上現在のものということになるから、どちらも同じく「表象」にすぎず、質的差異が認められないのがむしろ当然だからである。「現実的なもののなかに席を占めた連想説は、実現された現在の状態のなかに、その過去の起源の印を発見しようと努め、記憶を知覚から区別するために、あらかじめ量の差でしかあり得ぬように定めておいたものを本性の差にしてしまうために、無益な努力をするだけが精一杯なのである」(p.150)。知覚と記憶はともに現在であるという事では一致しているから、出来上がった記憶と知覚の間に質的かつ時間的な差異がないのは当然である。そこには強い意識状態（知覚）と弱い意識状態（記憶）しかない (cf,p.149)。

このことが意味しているのは、考察の出発点を現在に置き、記憶も過去の出来事についてわれわれが持っている現在の状態であるとするかぎり、一方で過去と現在の区別がつかなくなるか、他方で過去が消えてしまうかどちらかであるということである。弱い意識状態が記憶であるとしよう。（仮定上現在しかわれわれが知らないとすれば、時間性をあらかじめ導入しておくことはできないから、弱い意識状態が記憶であるとは言えるが、記憶が弱い意識状態であるとは本当は言えないはずである）ところで、われわれはキマイラについて弱い意識状態しかもたないとすれば、キマイラが過去に実在したことになるのであろうか。このような立場では知覚と記憶と想像が不可避的に混乱してしまうのである。

そこでベルクソンは出来上がった記憶にかえて、潜在状態で残存している記憶

を提示するのである。「記憶を再発見して、わたしたちの歴史の一時期を呼び起こそうとする場合わたしたちは現在から離脱することによって、まず過去一般のうちに、ついで過去のある一領野にわたしたち自身を置きなおす独特な働きを意識する。これは手探し仕事であり、写真機の焦点あわせにも似ている。けれども、わたしたちの記憶は、まだ依然として潜在状態にある。わたしたちはそうようにして適切な態度を取りながら、その受け入れを準備するだけだ。しだいにそれは凝縮していく雲のようにあらわれてくる。それは潜在状態から現実的状態へ移る。・・・しかしそれは深い根によって依然、過去につながれたままであり、いったん現実化された時に、自己の本源的な潜在性を感じないとすれば、すなわち現在の状態でありながらも現在から切り離されたあるものでないとすれば、わたしたちは決してそれを記憶として再認しないだろう」(p.148)。

存在しているのは現在だけであって、過去も未来も端的に「ない」ものであり、記憶も現在的なものにすぎないとする立場は、記憶が記憶として認識される理由すら説明できない。それは想像と回想と知覚を混乱させる。「思い浮かべることは回想することではない」(p.150)。これに対して、ベルクソンはわれわれが記憶が過去のものであることを知っているのは、その潜在性によると主張しているのである。

(四)

ベルクソンが『物質と記憶』で目的とした事柄のひとつは「主要な形而上学的问题を観察の領域に移し入れること」(p.9)であった。われわれが追求している問題をベルクソンはどのようにして観察の領域に移し入れたのであろうか。

「これらの実験者たちは、文字が一字一字読まれることを有名な論文のなかで主張していたグラースハイに対して、すらすら読むということが眞の見通しの仕業であることを明らかにした。わたしたちの精神は、ここかしこに何か性格のある特徴を求めては、間隙を記憶イマージュで充たすのであり、記憶イマージュは紙の上に投射されると、実際に印刷されている活字に取ってかわり、わたしたちにその錯覚を与えるのだ。このようにわたしたちは絶え間なく創造し、また再構成する。わたしたちの判明な知覚は誠に閉じた円環にも比すべく、精神に引き入れられる知覚イマージュと、空間へ投げ出される記憶イマージュとが互いに後続して走るのである」(p.113)。このベルクソンによる事実の確認が正しいとすれば、「注意の働きは精神と対象との深い連関を含み、これは全く閉じた回路で

あるためより高い集中状態に移ろうとすれば、必ずその都度、古い回路を含む新しい回路を徹底的に創造しなければならず、これは認知される対象以外に、古い回路と共にものをもたないわけである」(p.114)。換言すれば、「注意の進展は、結果として単に認知される対象ばかりでなく、それが接合するますます広範な諸体系を新たに創造するので、円環B・C・Dが記憶のより高度な拡張を表すにつれ、その反射はB'・C'・D'において、実在のより深い層に達することになる」(p.115)。

ベルクソンの言いたいことは、知覚と過去にその根をもつ潜在的記憶との共同作業なくして、新しいものの創造はあり得ないということである。新しさとは古いものの新しさである。ベルクソンが「実在のより深い層」といっているのを見過ごしてはならないだろう。実在のより深い層とは、同じものの中にもわれわれにとっての新しさが内在しており、その新しさをわれわれは時間を使用することによって認知するということを意味している。同じものについての意識は同じではない。再認の病気とはこの意味においては時間を利用できない病気であり、新しさを見つける病気である。再認の役割は、過去の出来事の記憶によって現在的なものを、もう一度同じように認識することにつきるものではない。再認は結果としての新しさを運ぶのである。

確かに、再認はベルクソンも述べているように、ついには自動的運動に至るかもしれない。しかし自動的運動に至ろうとするまさにその時にも記憶が常に介入している。自動的運動は新しさの認識の裏側にすぎない。慣れ親しんだものなかに新しさを発見せねばならない。新奇なものだけが新しいのではなく、新奇なものを新しいものにする作用があるのである。「明らかに、新しさと過去の保持はひとつのダイナミックな事実—時間の進展—の、ふたつのアспектである。これらふたつのアспектが概念化されるときだけ、それは相互に排除的であり矛盾するものとしてあらわれるるのである。具体的経験においては、お互いに溶けこみあうものであって、一方は他方なしでは生じないのである。もっと正確に言えば、それらはただひとつのプロセスに対するふたつの名前にすぎない」⁽⁴⁾。

(五)

われわれがここまで追求してきた問題は、過去の出来事についての記憶がまさに過去の出来事の記憶であることをわれわれが知っているのは何故か、という問題である。というのは、今一系列的な時間観では、過去は既にないものであるか

ら記憶は現在のものであると言わざるを得なくなり、したがって知覚との区別が無くなってしまうであろうからである。このことは、記憶が過去の出来事の記憶であるとされる限りで、実は現在と過去の区別すら曖昧になってしまうということである。そこで、最後の手段として、記憶は脳に蓄積されているという仮説を採用せざるを得なくなるだろう。脳は現在のものだからである。そこでベルクソンは脳が本当に記憶を蓄積しているのかどうかを研究したのである。もちろん脳は記憶を蓄積するものではない。われわれはここでは、ベルクソンのその主張を受け入れたうえで、もっと概念的に議論していきたい。

今一系列の時間観では記憶の記憶性を明らかにすることができなかった。したがって、われわれは今一系列以外の時間性を採用せざるをえないが、過去が保存されるという持続的な時間観以外のオルタナティヴをわれわれは持っているだろうか。

記憶の記憶性とは記憶の過去性のことである。過去の出来事についてわれわれが持っている記憶が現在的で現実的であるものだけならば、われわれは実は過去について知り得ない。そこで記憶の潜在性が言われることになるのである。「直接的過去は、知覚される限りにおいて、後に見るよう、感覺である。・・・だから、私の現在は同時に感覺でもあり、運動でもある」(p.153)とベルクソンが述べているからといって、ベルクソンが現在と過去を混同してしまったことはならない。混同しているのは、今一系列的時間のほうである。およそ、あらゆる時間論は過去と現在が深く結合していることを認めなければならない。しかし過去と現在の関係を程度の差異にしてしまってはならないのである。これはつまり過去が現在とは異なるが、それでも何らかの実在性をもつべきであるということを認めることである。

であるとするならば、何故過去は消えてしまったと考えられているのであろうか。そこには、よく分析されていない概念があるはずである。重要であると私は思われるものをいくつか列挙してみよう。

その第一は、不在と非存在の混同である。あるものが意識のなかに存在していないからといって、それが端的に存在していないことにはならない。これはベルクソンの「無意識」の議論である。ベルクソンによれば、不在と非存在の混同は「有効性」を媒介にしている。存在はわれわれにとって危険をさけるにせよ、そこから利益を取り出すにせよ、われわれの行動にとって意味のあるものであると

されるから、すなわち有益なものとされるから、それが不在になれば非存在になると考えられてしまっているのである。有益なものとは心理的なものである。「しかし今からは、ベルクソンが無意識という言葉を、意識の外側にある心理的実在を示すためにではなく、心理的でない実在を示すために用いていることをわれわれは理解すべきである。心理的でない実在とは、それ自体としてある存在のことである」⁽⁵⁾。なぜなら「現在だけが心理的である」⁽⁶⁾からである。ベルクソン自身は意識と心理という言葉を区別なく用いているようであるが、このドゥルーズの区分そのものは妥当であると思う。ベルクソン自身以下のように述べている。「しかもしも、意識が現在に、すなわち実際に生きられるものに、すなわち行動しているものに、特徴的な印にすぎないとするならば、その時、動かないものはある仕方で存在することを必ずしもやめなくても、意識に属することをやめることができるのであろう。換言すれば、心理的領域においては、意識は存在の同義語ではなく、単に現実的行動あるいは直接的有効性の同義語にすぎない」(pp.156-157.)

第二は、過去の「もはやとり返しがつかない」という性質と不動性の混同である。過去のひとつひとつの出来事を変更することはできない。この意味で過去は確かにとり返しのつかないものである。しかしながら、そのことが正しいとしても、過去の全体がもはや動かないものである、すなわち時間的生成は認められない、ということにはならない。それは部分と全体を取り違える誤りである。そして、その部分たるや純粋な記憶ではなく、既に現実化してしまったものにすぎないのである。

ベルクソンは記憶について「記憶はこれと反対に無用なままでいるかぎり無力であり、あくまでも全く感覚を交えず、現在との接觸を欠いており、したがって拡がりをもつことがない」(p.156)と述べるが、この無力さは有効性の欠如を意味しているのであって、不動性を意味しているのではない。過去の不動性という概念は、現在と過去が外在的関係において結ばれているとしたときのみ成立する概念である。しかし過去が現在と深く結びついているということは何か偶然的な出来事ではなく、まさに過去の本性を形成しているのである⁽⁷⁾。したがって、ベルクソンにとって、全体としての記憶はきわめて活動的なものなのであり、それは個々の記憶が不動的に表象されることと矛盾しないのである。ベルクソンは例えば次のように述べている。「記憶の全体の無数な可能的反復を想定するなら

ば・・・」(p.190)。「この記憶力自身はわたしたちの過去の全体とともに突進を敢行することによって、それ自身の可能な最大部分を現在の行動に組み入れる」(p.187)。

第三に、過去は徐々に現在から「遠ざかりつつある」という幻想である。われわれは日付のついた記憶によって過去を想起することができるが、この時、昨日の記憶よりも一年前の記憶の方が「遠い」記憶であると考えがちであり、したがって過去は徐々に「死んでいく」と考えがちである。現在を中心にして、過去はそこからだんだんと「離れていく」というわけである。そこで、脳の中に記憶が蓄積されるとすれば、脳は「死んだ」記憶が日付の順に並べられた、いわばモルゲにすぎないということになる。ところが、この観念は時間的なものに空間的な思考方法を混入させた不純な観念にすぎない。故に「遠い」記憶と「近い」記憶という区分はみせかけである。

この幻想は「そのようなもの（新旧の現在にはさみこまれているもの）としての過去が現在であった後でなければ構成されない、とわれわれが信じ込んでいる」⁽⁸⁾ことから由来する。現在から何者か（例えば、活動性）を引算したら過去になるというのである。過去は現在が持っていた何等かの性質を失ったものと定義されることになる。ところが、それは現在と過去が程度の差異によって結合されるということであるから、強い記憶と弱い知覚の問題に逆戻りするだけである。

第四に、過去の過去性には程度の差異はあり得ないという予断である。現在は「ある」ものなのに過去は「もはやない」ものであるとすれば、過去の過去性に程度を設けるということ自体が不可解であろう。ところが、過去の個々の出来事は確かに変更することはできないが、過去の全体が不動であるわけではないということが認められるならば、すなわち全体としての過去の活動性が認められるならば、その活動には程度の差異があっても構わないことになるであろう。そしてベルクソンが「意識のさまざまな平面」で述べていることは、過去の過去性にも程度の差異があるということなのである。「だから、あたかもわたしたちの過去の幾千万の可能な縮図のなかで、わたしたちの記憶内容が無数回反復されるようである。それらの記憶内容は記憶力が収縮するほど平凡な形式をおび、記憶力が膨張するほど個人的な性質をおびる」(p.188)。「したがって、記憶力は確かに緊張と生命力の相次ぐ異なった諸程度をもつのであり・・・」(p.189)。

実際、過去が現在から徐々に遠ざかっているものであり、個々の記憶は日付の

順に並べられているとするならば、それらは不動性という共通の性質によって定義されているにすぎないから、偶然性を引き合いにだすほかは何故この局面でこれこれの記憶が選ばれたのかを説明することができないはずである (cf.p.185)。というのは「意識は心理的事実が独立な状態で浮動することを決して示してはくれないからだ。第二の仮説（ベルクソンの仮説）では、心理的諸事実の連帶が確認されるだけのことであり、それらは反省のみがばらばらな断片に分かつ未分の全体として、いつも直接的意識に全部与えられている。この場合説明すべきことは、もはや内的状態の凝集ではなく、意識がその内容の展開を引き締めたり広めたりする収縮と拡張の二重運動である」 (p.185)。

(六)

これら四つの混同・予断に共通する考えは、過去は現在への偶然的付加にすぎないというものである。記憶がわれわれの生活の役に立っていることを否定することはできないから、脳の中に蓄積された記憶における過去の残存を認めざるを得なくなる。しかし過去の個々の出来事を変更することはできないから、過去の記憶は不動であり、現在から遠ざかっていくものであるとされる。すると今度は不動であるものが何故に現在にやってくることができるかを説明することができない。過去は現在に偶然によってうまい具合に付加されるというわけである。

ベルクソンの言う持続はそのようなものではない。過去は現在から「遠ざかり」はしないし、現実化されたら日付をもつ記憶も、記憶の全体のなかでは活動的である。これは記憶の全体が不可分な全体をなしている、つまり「遠い」記憶も「近い」記憶もありはしないということである。全体としての記憶は意識のさまざまな平面を移動する。過去が現在への偶然的かつ外在的な付加であるのではなく、現在が過去に対して内在的あるいは不可分的なのである⁽⁹⁾。過去はそれ自身の運動によって、現在を現在たらしめる。現在が通りすぎていくのではなく、すなわち今一系列的時間があるのでなく、過去が現在を現在にしているのである。過去は、アキレスと亀のように、いつまでたっても現在の後にあって、現在ができたのちにやっと過去ができるというものではない。「本当は記憶力は現在から過去への後退のなかにあるのではなく、反対に、過去から現在への進展のなかにあるのである」 (p.269)

幻想は、現在こそが時間の中心であるという予断からやってくる。過去はそれへの付加あるいは逆に引算である。たとえ今一系列的時間の「今」にある程度の

持続性を認めることができるにしても、その本質は時間の切断である。ベルクソンの言うように「根本的な幻想は、流れつつある持続そのものに、わたしたちの切断による瞬間的断面の形式を移し及ぼすということにある」(p.166) のである。

(註)

『物質と記憶』からの引用・参照はP.U.F.の単行本を用い、ページ数を直接本文中に記した。引用文中の傍点はすべて筆者のものと思われたい。また、引用文中の丸括弧は筆者の補足である。

- (1) H.Bergson, *L'evolution créatrice* (P.U.F.) ,p. 2 .
- (2) cf. M. Čapek, *The New Aspects of Time : Its Continuity and Novelties* (Kluwer Academic Publishers, 1991) , p.30
- (3) G.Deleuze, *Le bergsonisme* (P.U.F. 1968) , p.54
- (4) M. Čapek, *op.cit.*,p.23
- (5) G.Deleuze, *op.cit.*, p.50
- (6) *ibid.*, p.51
- (7) cf. M. Čapek, *op.cit.*, p.39
- (8) G.Deleuze, *op.cit.*, p.53
- (9) cf. M. Čapek, *loc.cit.*

(やまだ ひでとし 哲学)